



精神科医療における「動物」(アニマル・セラピー)

座長 古荘 純一

精神科医療では、愛着形成、関係性の構築、コミュニケーション能力の発達や障害、対象喪失などが、対人関係の問題として臨床的に検討され、分析されている。しかし、これらはあくまで人間同士の問題である。一方社会と時代は、女性の社会進出と晩婚化、少子化と高齢化社会、核家族化、高度技術を駆使した機械化とそれに伴う高度学歴社会など、これまでにない変化を生じている。

これに並行する形で、人間と動物(ペット)の関係も変化している。ペット関連産業が成長し、動物の中飼いが増え、そしてペットは、「世話が必要でいつか死という別れが来る」という生きた対象であり、より「家族」と「子ども」に近い存在となりつつあるとも言えよう。しかし、生きた存在である動物(特にペット)については、その家族ダイナミクスや各精神障害との関係、治療応用など、まとまった議論はなされていない。そこで今回は、精神医療と動物の関係について、新たな視点で議論すべくシンポジウムを企画した。

最初に、シンポジウム企画者の横山章光先生に代わり、石坂奈々氏に精神科医療と動物の関係について講演をいただいた。DSM-IV-TRの中では、「動物」というキーワードは、「行為障害」「動物性愛」「動物恐怖」しかないが、ペットとい

う視点から精神医学を見直すと、「動物虐待」「ペットロス」「アニマルセラピー」など、多くのキーワードが存在する。新たに家族としての役割を担うこともある動物と人間の関係には、ポジティブとネガティブ両面が混在する。ポジティブな面では治療応用につながる一方で、ネガティブな面では精神疾患の経過に少なからず影響があることをふまえて、動物との関係性分類および現場でどのような活動がなされているかが報告された。

次に末丸啓二先生に、統合失調症とアニマルセラピーについて講演をいただいた。アニマルセラピーは統合失調症の精神症状の軽重にかかわらず治療導入が可能であること、独自にプログラムを作成され、実践・評価を行った結果、いくつかの効果や発展の可能性が示された。

次に大矢大先生に、解離性同一性障害患者とペットについて事例を提示いただいた。ペットとして仔猫を飼い始めたことにより、虐待の記憶を担う子ども人格(交代人格)の成長にさまざまな影響をおよぼしたことが報告された。ペットとの関わりが患者の人格の統合を含め治療促進的に働いたという発表を興味深く拝聴した。

次に、古荘が広汎性発達障害の子どもを対象としたドルフィンキャンプの経験を提示した。治療

効果としての評価は難しいが、家族のエンパワーメントと二次合併症の進展に何らかの効果を示したという視点で動物介在療法の意義を推測した。

最後に、矢野勝治先生に、森田療法における動物飼育の意義について解説をいただいた。作業療法の一環としての患者の関わりについて提示され、現実に踏み込み、事実在即して行動する姿勢を養う上で、動物の世話が格好の治療契機につながると指摘された。

総合討論では、精神医療の現場に動物を介在させることについての衛生面についてや、その際に適切な動物種は何なのかについてなどの具体的な質問を受け活発な討論が展開した。アニマルセラピーについては、科学的な根拠や治療的な評価が

少ないのは事実であるが、フロアからは肯定的かつ具体的な実践方法についての質問が多くあり、シンポジストとフロアの間で討論が繰り返された。会場にも臨床経験をお持ちの先生が少なくなく、それぞれの臨床の現場で応用して実践の展開を考えられている印象を持てたことは喜ばしいことだった。

精神科医療は他の医療分野と比較して「動物」を取り入れやすい領域であろう。多くの臨床医が散在的に持つ事例を集積し分析することにより、視野が広がることが大いに予想でき、精神科医療における動物との関わり、「アニマルセラピー」には、今後、将来に向けての展開が大いに期待できると考えられた。